

座談会

環境情報学部情報リテラシー教育の10年

奥平 雅士 櫻井 武 武山 政直 土橋 臣吾 中村 雅子 山田 豊通 横井 利彰

環境情報学部では開設以来、学部共通基礎科目として語学と情報を二つの柱として取り組んできた。情報リテラシー演習関係では、1年前期「情報リテラシー演習」、後期は「情報発信演習（現在は「情報探索入門」及び「情報編集入門）」を軸として実施し、プログラミング関連やデータ分析関連科目へと幅を広げて来た。これ以外にも、「データベース」、「アルゴリズム入門」、「コンピュータ・システム」等があり、専門科目へと連なっている。編集部では、開設10年ということでそれに関わった教員が集まって振り返ってみるのも良いのではないかと考え、開学当初からシステム設計、カリキュラム設計や演習等を担当いただいた先生方に加え、情報メディア学科の増設で途中から入られた諸先生にも加わっていただいて、継承という点も考慮したメンバーでこの10年を振り返ることとした。

出席メンバーを紹介させていただく。元本学部助教授で、現慶應義塾大学経済学部の武山政直准教授、そして本学部奥平雅士教授、櫻井武教授、横井利彰教授、中村雅子准教授、土橋臣吾講師。司会は、山田豊通情報メディア学科主任教授。

「カリキュラムをゼロから立ち上げて・・・」

山田：まずは10年間を振り返ってみて、というところから話をしてみたいと思います。そもそも環境情報学部の情報分野については、新学部設置準備段階から、ここにおいで武山先生、横井先生をはじめ事務の支援でしっかりとシステムが設計され、そのコンセプトや実践についてはその後私情協で発表したりしていましたね。武山先生は途中で他大学に移られましたが、ここで教えていただいたときを振り返ってみて一番印象に残っていることはなんですか？リテラシーの教育というところで、慶應義塾大学藤沢キャンパス（SFC）で培った経験を踏まえて、新しいキャンパスをゼロから立ち上げるというのは、ある種珍しいケースだったと思うのですが。

武山：SFCの時は、ワークステーションのUNIXをベースにやっていました。WindowsとかMS-OFFICEなどを利用した教育は、環境情報学部へ移ってからが初めてです。しかも映像などを積極的に取り入れたのも初めてです。SFCにいるときから興味があり、研究レベルではやっていましたが、教育という観点ではパソコンだとかデジカメ、ビデオを使ったことがないままここに来て、実験的に試行錯誤でやっていたということがあります。その意味では、カリキュラムをゼロから作り上げたということで、印象に残っていることというと、大変だったなあと(笑)。それと同時に面白かったということでもありますね。



武山政直先生

山田：映像編集を教えるのは、結構大変ではなかったですか？

武山：初年度から映像編集はありましたっけ？もう10年も前の話で、初年度からいきなり始めたか記憶が定かでなくてすみません。

中村：最初の年は、夏に担当教員みんなで合宿をして、予習をしましたね。ただ当時と今とでは教える中身も大分変わってきたので、その辺、新しく来た先生方はピンと来ないところがあるかもしれませんね。Word, Excel, タグで書くところから始めるホームページ作成、デジカメ画像をPhotoshopで加工するのと、動画をPremiereで編集するのと・・・

山田：その教材作成などを武山先生お一人にやっていたので、かなり大変だっただろうと想像しますが、経験はおありだったのでしょうか。

中村：当時はまだ他の大学では、こういう情報演習をやっていたんですかね。

武山：一ユーザーとして個人ではやっていましたが、きちんと理屈も踏まえ、どんな使い方があるか、最新の機器はどうなっているのかなどを学生に教えるという経験はなかったですね。

山田：結構、興味本位もあってそれをカリキュラムに・・・ということもあったのですかね(笑)。

武山：興味を持たざるをえなかったというか(笑)。どうせやるなら興味を持ってやろうと思いましたね。

山田：中村先生は、コンピュータ等のご専門ではないのですが、こうしたことを担当するとは思ってもよらなかったかもしれませんね。以来随分活躍していただきましたが、そのような意味でどんな印象をお持ちですか？

中村：ある意味、私がベンチマークだったと思いますね。

私がわからなければ学生も分からないだろう的な存在でした(笑)。

横井：最初にお会いした時は「私には出来ません」と断られてしまいましたね。

中村：いや、社会調査の先生が欲しいと言われて面談に伺ったら、パソコンは使えますかと聞かれ、自分で使う分には、それなりに使えますと答えたら、いつの間にかこの科目の担当することとなっていたということです(笑)。

武山：私はどちらかというと文系タイプのバックグラウンドなので、映像を入れていったというのは、一つにはプログラミングやコンピュータの仕組みにそんなにとっつきが良くない学生でも、映像という新しいメディアに興味を持ってもらえるのかな、ということを多少意識していましたね。

山田：そういう意味では工学的にならずに、あくまで使う側の視点というのが、武山先生、中村先生が担当となられた理由ですね。これが我々のようなエンジニア系の教員だけだと、それこそもっとプログラマ的な授業になりかねなかったのでしょうか。

山田：それにしても、これだけ確立された形のカリキュラムを初年度から設定できたということは上出来のような気がしますね。横井先生には一貫して横浜キャンパスのネットワークやコンピュータなど情報系システム設計の全般に教員代表として携わってこられました。横井先生の一番の印象はどんなことでしょうか？

横井：当時、先が見えない中で不安を抱えやっていました。「教育年報」に以前まとめたのを思い出しながら考えてみたのですが、どういう教育をしていくのかを考える際に、コンピュータの基本的な使い方など工学部的な教育は、ほとんど他の大学でもなされていました。しかし、Wordやインターネットの使い方などは基本的にそれほどやっていなかったと思います。実は、私は環境情報学部のコンセプトが提示されて、ある程度固まったときに少し遅れて開学のプロジェクトに入ったのです。情報教育の枠はこの辺ですというのが示されていました。いかにその趣旨に沿った形で背景のシステムも含めてどうするかというところで考えましたね。



横井利彰先生

山田：フレームワークはあるけど、中身は埋めてくれ、という感じですかね。

横井：ただその時に我々が想定したものは、ここまで発展するような内容ではありませんので、情報発信

関係の部分での広がりというのは、本当に頼もしいというか、土台である技術的な部分で準備したものが役に立ったのかと思うと、嬉しかったですね。《資料を見て》ここにもちょっと書いたのですが、コンピュータ上で、フル画面・フルフレームで編集した映像を見られるようになったのは、学部開設直前、96年の終わりごろです。やっとな普通のTVやビデオで見られる品質のものが漸く登場した時です。デジカメにいたっては35万画素という時代だったので、カリキュラムを考えた時は、そのようなものは絶対必要だという話はありませんでしたが、こんなに、みんなが上手く表現できるようになるとは、思いませんでした。研究で2、3台使用するということは他の大学でもあったので、授業で一斉に揃えることで上がる効果を想像するというか、そういうことが出来る雰囲気があったというか、意気込みを受け止めてくれる雰囲気が、新学部開設準備室を含め参加された先生方にもありましたね。学部自体をゼロから作るという趣旨を教員がきちんと共有して、その上でいろいろ発想を出しあっていたという感じがしました。

「日本および世界でも初めての Windows によるトータルシステムの教育環境」

山田：先ほどおっしゃっていた先が見えない不安というのは、カリキュラムに対してと言いつつも、他にもあったのではないのでしょうか。

横井：カリキュラムのほうは、グループでいろいろ検討していく中で固まっていったのですが、それと同時に私は、ハードウェア系というか業者などとシステム設計の裏づけを取る作業がありました。先ほども話に出ましたが、コンピュータのOSの選択には本当に悩みました。慶應はワークステーションを使いOSはUNIXでしたし、当時話題になっていた会津大学もUNIXでアピールしていたし、その中で漸くMicrosoft社から開発段階の名称がCHICAGOというOSが95年に出て、いわゆるWindows95ですね、まだ調査レポート程度の段階で、現物がなく、しかも個人用パソコン版ではなくグループで使えるNTが出たのが開学前年の96年12月ぐらいでしたからね。それで本当にワークステーションでなくパソコンに完全に移行しているのか、それでも失敗したら非難が来ることは目に見えている。かといってUNIXだと恐らくうちの学部の設立趣旨にちょっとそぐわないだろうと、やはりもっと簡単に使えて、情報を収集したり表現したりする部分に注力すべきで、技術的なOS

の操作に入り込むのはあまり良くないと思いたね。なるべく使いやすく、ということでした。

山田：確かにギリギリの綱渡りで、UNIX にするのか Windows にするのか、1年遅くても、1年早くてもという絶妙なタイミングでしたね。それを相談できる相手というのは、どなたかいたのですか？

横井：根本的なことだと、富士通のSEの生沼さんと工学部情報処理センター技術員の二野宮君、あと厳先生（元慶應義塾大学SFC助教授で、新学部設置準備室の段階からに本学に着任され、その後慶應義塾大学SFC助教授に移られる。現同学准教授。編集部注）にも協力してもらっていました。ビデオ編集でも試作として売られているものを組み合わせて、きちんとHDDが追いついて編集できるかどうかを、世田谷キャンパス16号館の厳先生の研究室の一部に環境をおかせてもらい検証していました。技術的なシステムの土台があつてこそ、いろいろな教育の発想の花を咲かせられるだろうという考えましたので、そちらのほうをむしろしっかりやっておかなければならないな、と思いました。そのため、各種文献を読んで装置を揃えテストを重ねていました。今では当たり前のようにノートPCをLANにつないでDHCP、つまりインターネット上の住所にあたるIPアドレスを、可搬性のコンピュータが接続された時に自動的に割り当てる技術を使ってインターネットに接続していますが、当時はその規格が決まったばかりでしたが、これを使う前提で学内LAN環境の設備計画を進めましたので対応製品が間に合うかもかなり気を揉みました。

山田：ファーストユーザみたいなものですね。そういう意味での不安はありますね。

横井：当時いろんな大学を見学しましたが、情報コンセントは教室や廊下にあるのですがIPアドレスが書いてある。つまり使うたびに自分でその数値に設定しなければ使えない状態が普通でした。このことを含めて、96年辺りというのは、様々な情報技術が我々の考えていた環境に向けてまとまっていった時期ともいえます。

山田：そういう意味だと、日本でというか、世界でも初めてWindowsでトータルシステムの教育環境を作ったという先駆的なものですね。

横井：それでもまだ問題は残っていました。96年12月にWindows NTの日本語版がリリースされたのですが、発売された製品のままでは、当時



山田豊通先生

想定していた運用は不可能な状況でした。標準の環境では、個人毎に自分の利用環境を自由に設定できるものでしたが、これはかえって初心者は元に戻せなくなり、演習での教示画面とく違っていて混乱し授業進行に影響するため、これを避ける必要がありました。結局、毎回のログイン時にPCの状態を既定の元の状態に戻す、というスクリプトが必要となり、工学部情報処理センターのほうで開発しました。

山田：電源を入れたら標準の環境設定になって、設定を変更させても次のログイン時に全部元に戻るという仕掛けですね。

横井：それが出来るかでまた大変で、不安な日々でした。

山田：土橋先生は情報メディア学科新設時に本学部に着任されて5年目となりますが、このような経緯のある情報環境でリテラシー教育を行ってもらっていますが、印象はいかがですか？特に担当されている「情報探索入門」は、武山先生設計の「情報発信演習」が発展し、「編集」と「探索」に分かれたわけですが、そういうところに深く入っていただいていますか。

土橋：まずキャンパス全体の環境にビックリしました。先ほどのお話のログインの仕掛けというのは、他では見たことがありませんでした。他の大学で非常勤として情報系の科目を教えていましたが、ここへ来てこんなことが出来るのかと驚きました。技術的には全然分からないのですが、とてもスッキリしている印象でした。その他、非常に環境も整っているなという印象を持ちました。5年たつて、今は他の大学でもそれなりのものを持っているところも増えてはいるでしょうが、10年前にこの状態だったということは凄いなあという印象でした。

山田：授業では、「情報探索入門」という、変わった名前の科目を受け持ってもらっていますが、大学全体の「教育実践研究会」では、かなりいい形でまとめて発表いただいているので、ポジティブに考えていただいているかと思いますが、改めていかがでしょうか。

土橋：この科目は、横井先生中心にまとめていただいていたところに、担当することになったのが5年前になりますね。内容的には、学術情報データベースやインターネットをどう研究、あるいは情報収集に活用していくかということ、あとはアナログの図書館の使い方などを1年後期で教えています。必ずしも受講者全員が完全にやったことをすぐ一年生の段階から使うということでもなく、「研究とはこうやってするんだよ」ということを半期の

間にシミュレーションし、3年生でゼミに入った際に探索でやったことを思い出せば事例研などもスムーズに進むのではないかと。「情報リテラシー」というには少しずれるかもしれませんが「研究リテラシー」と言うと良いかもしれませんね。アカデミックに大学で活動していくということを教える良い場にはなっていると思います。

山田：そういう風に言っていただくと、私も共感しますね。事例研などでも「1年生のときの探索の発展形なんだよ」という言い方を結構しますね。

山田：奥平先生、今までNTTの最先端の研究所で研究なさっていて、土橋先生同様5年前に着任され、いきなり高校を卒業したばかりの学生にリテラシーを教えるにあたり、学生を教える環境や、あるいは教えている内容などの印象はいかがですか？いらしたときから5年たって、高校カリキュラムの「ゆとり教育」などの問題もありますか。

奥平：私は、以前は個人でUNIXを使う環境で研究をしていましたので、Windows系は嫌々情報交換のために、最後の最後で導入したくらいです。ここへ来てみてびっくりしたことがいくつかあって、まずハードウェア環境がきちんと整っているということです。デジカメやビデオなどが揃っていて、でもそれがあるだけではなく、情報メディアセンターなどが積極的にサポートする体制があって、何処で利用しても同じ環境で出来るのは、これだけの環境で凄いなあ、というのが一つです。もう一つは授業に関して、「情報リテラシー演習」を持って、今日はそのときのシラバスのコピーを持ってきたのですが、とても気の利いたタイトルで見ると楽しくなりそうだなと思いました。私がシラバスを作ったらもっとガチガチのつまらないものになるだろうなと思いました(笑)。大学で常勤として教えるのは初めてで、内容も単にスキルを教えるのではなく、具体的な例を示しながら教えるようきちんと設計されていて、5年前だったらまあまあそんなもんかなあとも思ったのですけれど、開学当時からこれだけのものを構想して「編集」(「情報編集入門」編集部注)、「探索」(「情報探索入門」編集部注)も含めてすごいなあというのが最初の印象でした。

その一方で、さてタイトルはこれで、情報リテラシーは何をやりましょうというのを走りながら考えなければならなくて、武山先生にいろいろ教えていただきながらすすめました。もっと武山先生が持っているらっしゃる豊富なコンテンツを盗めばよかったです(笑)。

武山：名前をつけておいたので、あとは各担当の先生に

お任せするということに(笑)。

奥平：武山先生の「情報リテラシー演習」は、最初から良く設計されていて、学生は何かを実行することで理解できるような仕掛けになっていると思います。2003年以降、私を中心となったのですが、基本的に武山先生のをいくつか出し入れしながらしています。今年度2006年からはゆとり教育で新しいカリキュラムとなったので、ちょっと変えましたが、それでも基本的に内容は踏襲しながら、リテラシーの基本的なところとしてはとても重要なところを最初からしていると思いますね。カリキュラムを今年度から変えたのは、だんだん学生のレベルがあがって、最初からかなり出来るという学生が増えてきたところにあります。ざっくり言うと10%ずつくらいずつ増えている感じですね。最初は1割くらいで、次から2割、3割と増えています。今年度に関して言うと特に、ログインするという点に関しては、ほとんど問題なく出来るようになってきている状況です。一方で、使い方に関しては、たいして変わっていないとか、常識的な面で、例えばメールマナーなんかもそうですが、使いこなせていないという感じがすね。

リテラシーの中身を替えた理由のもう一つに、後期の「プログラミング演習A, B, C」がなくなったので、プログラミングの代わりにするものを取り入れて欲しい、という強い要望がありました。それでもリテラシー演習の部分は基本的には変わっていませんが、圧縮して2回やらなければいけない部分を1回でみんな大体追いついてくるというのが、今の状況です。

山田：櫻井先生には、学部新設以来、情報と文化の科目分野では中心となっていたと、さらに後期の「情報発信演習」からリテラシー教育に加わっていただいています。特に、NHKでプロデューサーという経験も踏まえて、先生の目から見た印象深い話など何かありますか？

櫻井：やはり、学生と同じスタートラインに立ったことです。私はたまたま教員で教える側に立ちましたが、それまでMacintoshのみを使っていた、初めてこのキャンパスにきてWindowsに触り、あれよという間に「情報発信演習」を担当することとなりました。横井先生の授業を毎回見学させていただいて、そして次の時間にそれをすぐ実践するという綱渡りをしました(笑)。機械的なこと、PCをどうやって動かすかということは出来なかったのですが、ただ一つだけ、例えば画像の展開だとかそういうことの意義などの知識は一通りありまし

たので、自信を持って出来ました。今も、それからずっと「情報編集入門」を続けていますが、パソコンについてのスキルはそんなに変わった訳ではないのですが、私でも教えることが出来たということが驚きでした。というのは、結局、今日来ていただいている武山先生の「情報発信演習」のオンラインシラバスが大変良く出来ていて、実際今でもほとんどそのまま使っています。現在利用している教員からも好評です。今後、機材の変更や状況により変えていかなければならない部分もあるかと思いますが、それでも最初の設計がこんなにもしっかりしているのか、という印象を持っています。

「サイバーキャンパスでの教育の実際」

山田：93年からインターネットが出始めて、4、5年たって97年に本学部が出来て、そういう普及期に学生を教え、社会に輩出しているわけですが、その学生にとってこのリテラシー教育は、結果的に良かったかどうか、どんな面でよかったのか、あるいは他大学と比べてどうかということなど、特に武山先生や横井先生が当初設計くださったものが、最後巣立っていった学生にとって、どうだったのか、何か評価のようなものが聞こえてきますか？武山先生は、第一期生と今でもお付き合いされているようですが。

武山：研究室ゼミ生と私の研究に関心のある学生たちはメディアに興味がある者が多く、研究テーマ自体もそういうものでしたので、彼らは新入生のときにはリテラシー教育を勿論しっかり身に付けて、更にもっと高度なことをやりたい、あるいはもっと社会に生かすアイデアを考えたいという人たちが集まっていました。

山田：そういった学生の要求を十分満たせたのかどうか、物足りなかったことはないのでしょうか？

武山：そういった学生は、ある程度満足して卒業していったのではないかと思います。就職先も情報系が多いですし、割と良くコンタクトを取っている卒業生も企業の中でそれなりの活躍をしている様子です。そういう意味でも、学習した経験は生かされているという実感はあります。サンプルですけどね。あとの学生は、いわゆるITだとか、情報技術ということにダイレクトに関わらない分野の職についている卒業生のほうがかなり多いと思います。そういった学生が、果たして1、2年生で学んだ情報系のリテラシーをどういう風に3、4年時の専門の研究に取り入れて、さらに、今、社会に出て生かしているのかというのは、私自身は

追っていないので、むしろ聞きたいな、と思います。そこはずっと気にはなっていました。そこがどう変わって行くのかというのがテーマだと思っていましたので。

山田：そういう意味では、ベンチマークとおっしゃっていた中村先生、どう思われますか？学生の立場から学生満足度評価もずっと実施していただきましたが。

中村：そうですね、開学から5年くらいずっと、特に1期生は4年に渡ってアンケートを毎年取って、もしかしたらうとうしいと思われたかもしれません。でも、あれで少し安心して次に進んだ部分もあると



中村雅子先生

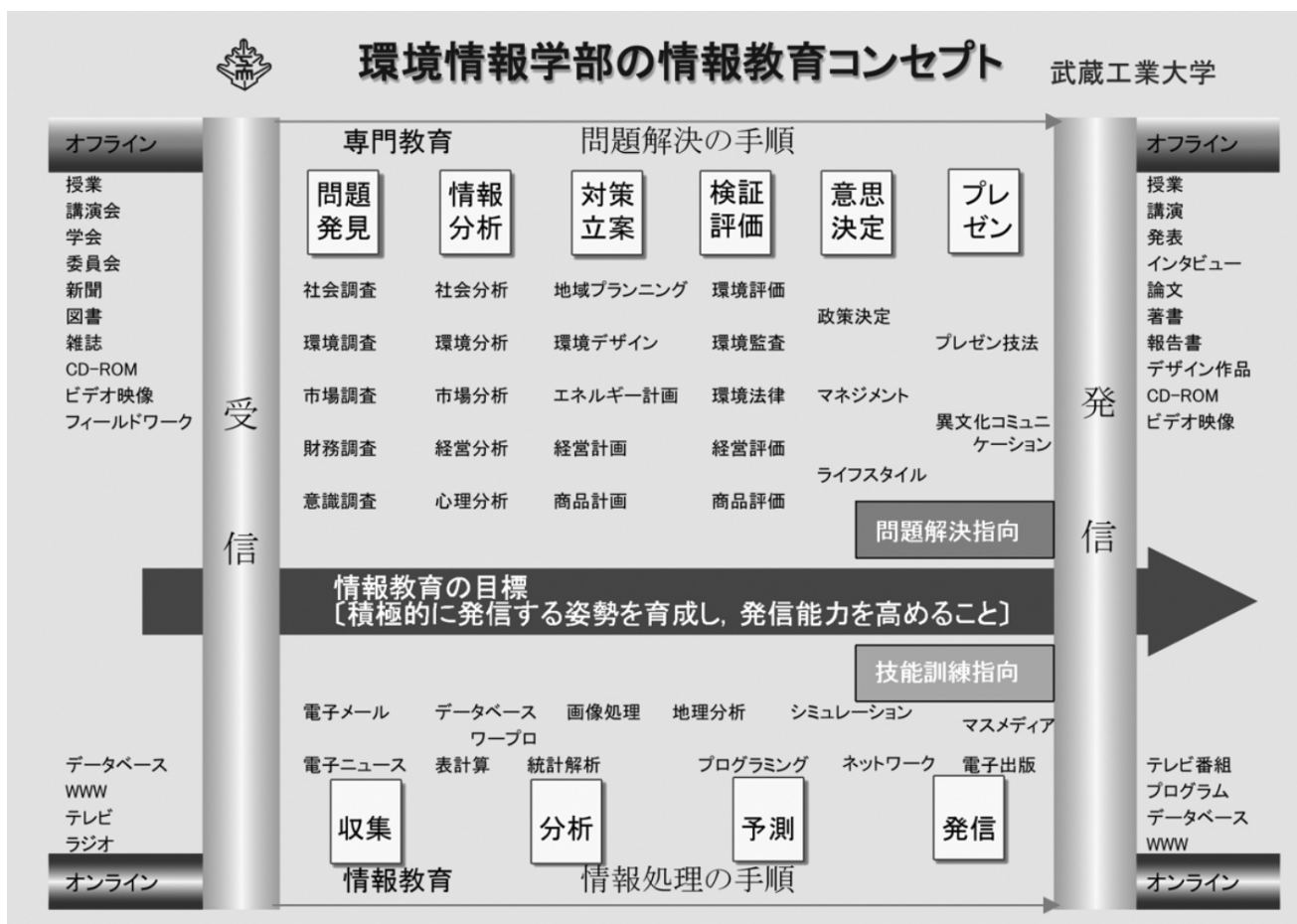
思うのです。横井先生覚えていらっしゃるでしょうか？1年の内容を5段階で聞いたとき、「ちょうどいい」が真ん中で「かなりやさしい」、「やややさしい」、「やや難しい」と「難しい」だったのですが、「やや難しい」が多かったのですよね。それでディスカッションをして、「やや難しい」くらいで、手も足も出ないほど難しいわけでもないみたいだし、ちょっと難しいから頑張んなきゃという方向で結構みんな答えていたので、これで行きましょうよ、みたいな話をしましたよね。

横井：要は向学心が出ていたということですよ。

中村：ええ。あれは正解だったと思います。うちの学生から、他の大学の学生はこんなことも知らない、という話を当時良く聞きました。そういう意味では学生達自身が本学部で学ぶことで自信を付けたり、恵まれた環境だということを実感持ってくれていたのではないかと思います。

山田：それはSFCが卒業生を出したときにも社会的に言われたことですね。SFCが凄く充実した環境だったのに、社会に出てみたらプアな環境で、会社に入っても逆に辞めてしまうといったような(笑)。うちの研究室の卒業生でもいますね。彼は会社を辞めていませんが、就職した職場の情報環境がプアだ、と(笑)。そういう意味ではそれなりに良かったのかなと。横井先生どうですかね、設計してくださった目で見ると、思い通りそれなりに身に付けてやってくれているという感覚ですか、それとも、もどかしさなどありますか？

横井：思い通りとまでいうのはなかなか(笑)。あくまで設立趣旨に沿ってなるべくその範囲内で必要と思われるものを組み込んだということに尽きます。つまり、その後の展開は先生方の発想次第と考えていましたので、なるべく先生方がよい発想をし



環境情報学部の情報教育コンセプト (1997年の環境情報学部開設時に作成)

て頂けるように、高度だが使いやすくを念頭に設計しましたので、学生にも伝わったかもしれません。

山田：この図は学部設立当初、環境情報学部の情報教育コンセプトを総合的に作ったマップで、位置づけがはっきりしていますが、今ではちょっと理想的すぎるような気もするのですが(笑)。これがどの程度到達されていると思われますか？

武山：最初設立するときは、情報リテラシー教育そのものの問題もありましたが、やはり新学部設立のなかで情報リテラシー教育をどういう位置づけで、どんなカリキュラムで設計していくか、という意識を僕も厳先生も持っていたのではないかと思います。ですからここを見るとかなり幅広く情報教育をカバーしているのかなと思います。

山田：単なる工学部のリテラシー教育云々ということではなく、学際的というか環境と情報の学部におけるそれということですね。

武山：そうですね。環境情報学部における情報リテラシー教育はどうあるべきなのかというのは、絶えずなんとなく気にはなって、そして情報リテラシー

教育がどこまで学部全体にどのような効果をもたらしたのかというのは、私の在職中は評価できていません。むしろ今の先生方にどんな具合になっているのか聞きたいですね。

横井：コンセプトは元々しっかりしているので、本当は、もっとそれぞれの要点についてしっかりリファインしたいという気持ちを持ち続けながら、ずっときている感じですね。

山田：それはリテラシー教育に求められるのか、2, 3, 4年の高学年の教育のほうに求められるのかというところが一つあるのかなと思います。リテラシー教育で全てを網羅することはなかなかできないのではありませんか。そういう意味でも、まわりの先生方から見たリテラシー教育というのが、例えばもっとやっておいてくれればとか、その辺、他から見た評価というのを聞けるといいですね。

奥平：例えば小堀先生の海外研修プログラムなどでは、参加した学生が現地での日やったことをきちんとWebにアップされています。それは最初にこういうリテラシー教育をしているからでしょうね。海外研修の場合は、基本的にはそういう情報処理よりも内容を重視している学生諸君が多いと思

ますがそれでもできている。今、入学してくる学生なら昔から出来たのかもしれないけど、今の3、4年、あるいはこれまでの学生には、それなりにリテラシー教育の成果が出ているかなという気がしますけどね。

横井：「情報発信演習」の部分の成果として、身に付いてはいますよね。

奥平：そういうことに関して心理的な抵抗がないというか、編集や探索に関してもそうですね。

横井：トリビアですが、「情報発信演習」という名前をつけたのは小沼先生（初代学部長。編集部注）だった、というのをちょっと思い出しました。当時はどうかなという意見もあったのですが、結果としては元の受信部分でのリテラシーと、それを使った、学部として目標としている発信をしていくというところに、うまく繋がっていったのかなと思います。それが外部に対してアピールでき、学生に対しても発信する、ということ学んだということをしつかり意識できたのではないかなと思います。

山田：そうですね。私も（文部科学省に採択された、編集部注）サイバーキャンパス整備事業の取りまとめをしていますけれど、ブッセル先生や後藤先生、小堀先生、史先生にしろ、メディアを使って自分達のやっていることを世界に発信するというのが、さりげなく出来ていて、いい意味でかみ合っているプロジェクトだと思いますね。新しいことを抵抗なくやれるというのは凄く大事ですよ。

武山：そういう意味では、私が今いる学部が経済学部なので、情報リテラシー教育が必修ではありません。全然やってこない学生が進級してくるので、ゼミでは割とパソコンをなるべく使ってやらせるようにしています。やはりそういう経験が全くないままに3年生に上がってきた学生は、最初はかなり抵抗があります。やっているうちに、周りに得意なのがありますから、自然とキャッチアップして来ますが、やはりそういう差は実際問題として出てくるのではないかなと思いますね。

山田：この学部では情報リテラシーは、空気のように自然な雰囲気の中で、変に身構えなくても出来ているのかなあということですかね。

櫻井：それは非常に感じますね。1期生のことを良く思い出しますが、私は「事例研」で PowerPoint の中に静止画と動画を貼り付けなさいという課題を出して、ISA(授業時間外のアシスタント。編集部注)に非常に迷惑をかけた経験があります。というのは私の研究室に来る学生は超文系の学生で、

その課題は彼らにとってかなりの難問でした。ただそういうふうにして飛び出してやっているからこそ、そして1期生がそういうことをしてプロダクトとして残してきたから、後輩も抵抗なく出来るようになったと思います。先ほど中村先生が、「やや難しい」あたりが良いのではないかとおっしゃっていましたが、やや冒険的なところから始めたことが、翌年からは、超文系といわれるゼミでも抵抗なく皆が出来るのですね。実際、私の研究室からSEになって、社長表彰を受けた卒業生もいます。ものすごく情報系が嫌い、コンピュータ嫌いを作り出しているということは決してないと思います。

山田：つま先立ちしながら、なんとかこなしているということで、進歩が少しずつあるようなカリキュラムにたまたまなっていたということですかね。先ほど奥平先生が JavaScript を1年前期に組み込んだとありましたが、その後たまたま JavaScript 関連技術も大きなウェイトを占める Web2.0 というキーワードが話題になりました。

奥平：何を入れるかだいぶ小倉先生、山田先生と悩みましたが(笑)。結果的に良かったということですね。

山田：JavaScript は世界的に注目されていますし、学生にとっても良いですね。そういうちょっと背伸びしている部分がいい形で出ている。逆に、この学部に来て嫌いになった子もいるのでしょうかね。何人かいるのかもしれませんが、聞かれたことはありますか？

土橋：聞いたことはないですし、全体の雰囲気はもう、好きとか嫌いの対象ではなくなっていると思います(笑)。

武山：そういう意味ではもう、当たり前の世界になったということですね。それはいいことですね。

土橋：環境化しているので、もしかしたらリテラシー教育のありがたみというのは学生の中では意識に上らないかもしれないですね。

山田：世の中全体もそうなっていますね。

土橋：さきほど中村先生もおっしゃっていましたが、他大学の同世代の学生と話すと、こことは全然違うというのに気づくというのが多いようですね。ちょっとした作業でもうちの環境だと何の問題もなく出来るのが、他ではできないというような話は良く聞きますね。

山田：そういう意味では、10年たって、まだまだある種少し先を行っている雰囲気があるのですかね。

櫻井：私が知っている限り、本当にコンピュータが嫌だ、ここは理系っぽいといってやめていった学生は一人だけですね。ただその学生は文学部で小説を書

いていたいというタイプでしたが、そんな極端なレベルです。

山田：私自身もやってみて、4年間の高等教育を受けた人たちですから、卒業したら自分が教えてもらったことを率先して教えるような、社会でリーダーシップをとるようになってもらいたいですね。今、e ジャパン計画で、日本全体を電子化しようとしています。たとえば自治体でもHPで市民にいろいろ周知したり、手続きなどもICカードを使ってインターネットで行うなどいろいろやっていますが、そのようなシステムを設計したりPRできるのは、課長・係長の年配者にはなかなかいないと思いますので、ここで学んだことを生かして自ら啓発してリーダーになっていって欲しいという期待はありますね。単に技術だけではなく、一貫してあるのは、どういう場面でどう使うかという、使うシーンも具体的な形でシミュレーションできるカリキュラムになっているという気がしますね。

横井：そういう意味で個人的にずっと思ってきたのは、彼らが社会に出て一番活躍できる時期というのは、入り立ての使い走りの時代ではなく、チームリーダーやグループリーダーになった頃ではないかなということですね。多様な分野のことを知っながら、かつ自分の専門はゼミでの卒論研究で培い、プロジェクト全体をまとめていけるということを期待しています。今、まさにその時点に差し掛かって来ているのかなという気がしています。ですから、今の卒業生の様子をもっと詳しく知りたいなという気持ちが強いです。

山田：そういう意味で印象深いのは、武山先生がグループによる構成主義という言葉をおっしゃっていたことです。「探索入門」にしても「編集」にしても、一人でやるのではなくグループで作品を作るといふ。「情報リテラシー」なども最後の発表は数人での一つのPowerPoint 作品を作りますね。

武山：個人ごとに制作されるとチェックするのが大変だという意味で、時間的な問題もあったんだと思いますけどね(笑)。

山田：グループ活動が凄くいい意味でのコラボレーションとでも言うのかな、一人でパソコンに向かって作業するのではなく、ITを使いながら共同作業する。そういう意味で武山先生はグループ的な教育活動というか、カリキュラム作りはどの程度意識されていたのでしょうか？

武山：意識していたとは思いますが、どこからそういうことを思ったのか起源は良くわかりませんが、やはりグループでやることによって、おのずとコミュニケーションする必要性が出てきますから、そ

うするとメールを使うということになるでしょうし、グループでやるだけでなく、一つのアウトプットを共同で作るというスタイルになって行ったと思います。グループで、コラボレーションという言い方ですかね、そういう体験を素朴な形ながら1年生の段階でやってもらうということは、いろんな意味で勉強になると思いますね。機器を使う、機器の操作を覚えるということと同時に、グループでいろいろアイデアを出しながら、そういうメディアも使って一つの作品を作っていくという、一連の体験として、リテラシー教育を位置付けたということだったと思います。

山田：ある種、企業に入ってしまったら当然の活動形態ですが、いま一つの科目だけでなく全ての科目がその方向にいつているような、それで最後は「グループワークルーム」のようなものが設計されたのですかね。

武山：あとはやはりパソコンを使うので、グループの作業を入れないとワンマシンだけになってしまう。その先にインターネットを使えば、メールやWebでコミュニケーションは取れますが、やはりどこかで生身の人間とのコミュニケーションを入れたほうがいいのかと思います。文系出身としてはね(笑)。

奥平：今回の「リテラシー演習」のカリキュラムを見直すときに、PowerPointはどうしようかというのがありまして、かなり高校でやっていますからね。しかし、最後には、グループワークとして、クラスの何人かであるものを調べてまとめて発表する、そういう機会は残しましょうよということでした。今はだんだんパソコンに向かっていく時代になっているので、その時代に抗ってようかなと思うのですよね。一方でそれが小グループを作ってしまうという傾向もなきにしもあらず、なのですが、結局、皆いろいろ分担して作業していますね。

「問題発見・問題解決というアプローチは成就したか」

山田：当初あった問題発見・問題解決というアプローチは、「探索」にしる、「情報リテラシー演習」にしる、出来ているのでしょうか？

奥平：「リテラシー演習」はまず、スキルを獲得することと割り切っているところがあります。情報倫理やメールマナーの部分はちょっと別ですが、その後の価値観とかその辺に関しては、まずはスキルを磨いて



奥平雅士先生

からですかね。

山田：「探索」は割とそれを意識されているのでは？

土橋：そうですね。特に正解があることをやっているわけではないですし、研究活動全般を、上級生になったときに出来るようにということを考えているので、情報やITだけに絞らず、今のような話は、「情報探索」でも、来年ちょっとテーマを絞って、今あるITをどうしたら良いか、ということをお願いとして投げかけてもいいのかな、と思いますね。

山田：そうですね、新しい携帯文化などに関して起こる問題、自らディレクトしていくとかいうか、そのようにやってもらうといいのですかね。昨日は、皆さん卒論概要締め切でご苦労されたと思いますが、学生の問題発見・問題解決は、最後はそこに行き着くわけですからね。それを1年目くらいから意識的にやってきたのですが、多分現在は掛け声だけになってきたかな、などと思うのですが、中村先生どうですかね、キャッチフレーズの問題発見・問題解決は、本学部の情報リテラシー教育ではどうだったのか、この10年間を振り返ってみて。

中村：リテラシーを、「探索」、「編集」とか「データ処理」や「社会調査演習」まで全て捉えると、そういう形で能力をつけようということ、ある程度達成できているのかなと思います。ただやはり、方法を方法だけ教えることのむなしさ、というのがどうしても付いて回りますね。その辺が難しいところだなと。ふと気づくと今日はメディア系の先生ばかりですけども、本当は環境情報学科と情報メディア学科に分かれた時点で、リテラシーの意味合いが変わった、変質したという問題が、学生のレベルの底上げと別にあると思います。環境の学生たちの中には、私はメディアじゃないから、というのが口実になって、ともかく情報系やプログラミングは単位を取ったら全部忘れる、みたいなスタンスの子もいないではない、というのを耳にしますので、もう一回位置づけ直して、やはり問題発見・問題解決は学部全体の共通のベースであるということをもっと押し出していくこと、だから環境の学生にとっても無縁なものではない、ということ再確認することが、今後の課題になっていくのではないかと思いますね。

山田：だとすると環境の先生と、ある意味カリキュラム開発ですが、またこういう議論をしていこう、という話になるのでしょうか。

中村：メディアのほうは、リテラシーがどう繋がっているか割と見えている。環境のほうでどう繋がっているのかをもっと見えるようにしないと、環境の学生も情報リテラシーの部分では全く同じカリキ

ュラムですからね。

武山：今は部外者の立場で勝手なことを何でもいえますが(笑)、環境の学生の中で、ITやメディアのことが好きだとか、あるいは先生でも実際に使って研究なさっている方がいらっしゃると思うので、そういった方と情報交換していくと、今おっしゃった意味での繋がりというのも少し意識できるかもしれませんね。

山田：逆に言うと最初の5年間は環境の学生しかいなかったのにやっている、ということがありましたからね。メディア学科ができたのは開学6年目からですからね。ただ分けたことでよりその辺がぼやけて、視点から欠落したかもしれませんね。

奥平：今年から環境の学生もプログラミングが必修になったのですが、「探索」とか「編集」は以前から両学科どちらも適当に人気があって、どちらの学生も出来るような科目として上手く設計されているなあと思います。最近の傾向としては編集のほうが人気は高いようですが、それはデジタルビデオ時代だからでしょうか。

土橋：一貫して「編集」のほうが、人気が高いですね(笑)

山田：まさにビジュアルで分かり易いからかな。

奥平：そういう意味では、ニーズには合っているのかなと思いますね。プログラミングに関しては確かに、メディアの学生でも苦手という子もいます。研究室訪問に来たときに「先生の研究室ではプログラミングはやらないといけないんでしょうか？」と聞いてきたりします(笑)。そういう意味では、ここの学部というのは、プログラミングは苦手だけれども他が得意であればそちらにいける、悪く言えばモラトリアムかもしれませんが、入ってから自分が興味を持てる科目を見つけられるといういい部分があると思います。土橋先生や中村先生はいわゆる環境教育分野とは違うかもしれませんが、先ほどの問題発見・問題解決というようなことをいえば共通したことではないかなと思いますね。

「演習科目に欠かせないアシスタント」

山田：「情報編集」の人気が高いという話ですが、アシスタント座談会(本号の『学生アシスタントからみた環境情報学部の情報リテラシー教育』参照。編集部注)を見てみると、一番しんどいなというのがPremiere といつか「情報編集入門」のアシスタントだというのがクリアに出ています。先に話がありましたが、背伸びした部分というので彼らが上手く吸収してくれていますね。座談会の内容を見てみると「自分達がリテラシーの教育をひっぱっているんだ」という自負心が、この意識は1期

生からもすごく強くて、それがいい意味でいまだに続いていますね。ただ彼らも4年生にもなると、今の1, 2年生だめだなあみたいなのも出ていますね(笑)。特に、教室間連携演習が始まってからまた、いろいろニュアンスが違ってきているかもしれないのですが。

横井：座談会の中にもありましたけれど、今では「バーチャル横井」、「リアル横井」なんて言っているみたいですけど(笑)。アシスタントから聞く話では、教員が部屋にいることでいいところもあるのですが、いないことで割と集中してやっているという話です。アシスタントに雰囲気聞いてみると必ずしも、先生の目が届かないからだらけているわけでもなく、それなりに自分のペースでしっかりやっている。そしてそういう環境だと、アシスタントもまた自分がしっかりしなければいけないと、アシスタントが自覚をしてくれている様などころがありますね。両学科にまたがる「Java入門」では、今週いよいよ最終で、先週は自分のプロジェクト課題を集中してやるという自習でした。私も両教室に行ってみたのですが、向こうの教室でアシスタント2人が、ある学生の質問にかかりきりになっていて「何か問題？」と聞いても「ええ」と答えるだけで、私に何も振ろうとしない(笑)。自分たちで出来るという感じで取り組んでくれていて、「大丈夫です」のような雰囲気が、ますます最近では強くなってきたかなと感じます。最初の「Java」をやったころは、ちょっと心もとないというか、自分に自信がないのでアシスタントの応募が少ない状態が続いて、私の研究室でさえなかなか応募してくれなかったりしましたが、最近は奥平研の田中さんなど女性のアシスタントもいるし、少なくとも今は、私が見ている「Java」には頼もしい学生が一杯いてくれています。私の入る隙がない、そのくらい信頼しています。

山田：「探索入門」もアシスタントの力量が問われる科目だと、やっぱりアシスタントによってグループの雰囲気が変わってくるという話ですが、その辺りは実際どうでしょうか？

土橋：アシスタントの業務範囲がコンピュータに関わることでなくて、グループディスカッションに参加してファシリテーターのようなことをやってもらっていて、だんだんアシスタントの内容が分かってきて、やりたいという子が集まってきてくれているのでスムーズに行っています



土橋臣吾先生

けど、誰にでも出来る仕事ではないですね。私のクラスは櫻井研の学生にきてもらっていますが、非常に良くやってもらっています。

山田：いい意味で兄貴分、姉貴分で生身の人間同士のディスカッション、コミュニケーションを活性化するために入ってきているみたいなのところがあって、単に情報技術だけじゃないということですね。元国立大学の先生がこちらに見えたとき、学部生がアシスタントをやっているのは信じられない、と言っていましたね。国立大学だと基本的にアシスタントというのは大学院生で、文科省の助成金も大学院生にしか出ないものですから。開学当初は、SFC や工学部からアシスタントとして来てもらっていましたが、3, 4年生の在学生在がいるようになってからは、やむをえず彼ら3, 4年生の上級生にアシスタントを依頼するようになりました。私からみるとそれでそんなにレベルが落ちたとは思わないのですが、みなさんはどうですか、3, 4年生が1, 2年生の演習授業のアシスタントを行うというのは？

奥平：私は、ここに初めてきた時は、びっくりしましたね。ほっておいてもやってくれるというというか。クラスページをつくるにしても何にしても、もう心得たもので創意工夫をしてクラスごとに違うページを作ってくれたりして。今年は全クラス同じホームページでした。誰かが作ってそれを流用したということでした。別に流用しても構わないのですが、そういう意味で何か自発的にしようというマインドは大丈夫かな、と若干危惧しないでもないのですが(笑)。スキルのには1年生のレベルがだんだん上がってきていて、落ち込みやすいところや間違いやすいところをサポートしてくれるなど、アシスタント学生のレベル自体は、学部生だからということではなく十分だと思います。

山田：アシスタント座談会を見ると、1, 2年生はISA (授業時間外のアシスタント、編集部注)のほうで、SA (演習授業のアシスタント、編集部注)はあまりいなくて大変だとか。私はある意味それでもいいのかなと思うんだけど、皆さんはISAとSAで意識されたことはありますか？

奥平：ちょっと学生に聞いても、1年生を助けてやろう、アシストしてやろうということよりは、ちょうど学校にいる時間でアルバイトになるという、アルバイト意識のほうがだんだん強くなっているかなあと思いますね。それと、やはり自分がそういうことをすることに、臆病になっている傾向はあるかもしれないですね。やってみたら、と言ってもいや私なんかには教えられません、とね。

山田：Premiere はそういう意味では、アシスタントになる学生も慎重になるのではないですか？

櫻井：いや、私はいつも恵まれていてましてね、その意味では感じたことはありませんね。今学期は奥平研の田中さんと内田さんでしたので。しかも内田さんはかつて私の「編集」のクラスにいました。「編集」で Premiere 作業に入ると、アシスタントは3人体制になります。これは Premiere が高度な編集ソフトのためつまづく学生が続出するからですね。しかし、配置されたアシスタントによっては、その優秀さゆえ3人は要らない、ということもありますね(笑)。ただ2年生、3年生の後輩がアシスタントとして育てているのかという心配はありますね。優秀な先輩をみていて教えるくらいのレベルはとてとてもとて、と言っていて、3、4年生になってから授業で SA になる傾向が強まったとすると、ちょっと SA の位置づけが誤解されつつあるのではないかなと思います。教えるということではなく、先生の指示に従って、そのクラスが円滑に行くように、というのが本来の仕事ですから、それともう一つは、リテラシー教育の話ですが、この「編集」でも、実際問題として皆がつまづいたりするのは、本当に基本中の基本を知っているかどうかということ。例えば Dreamweaver を開いてその中に画像を組み込むときに、Dreamweaver 自体の使い方が出来ているかどうか、ということが大切。確かに表面的には学生もアシスタントも、ある程度のリテラシー力はあるような気はするのですが、人に教えてみたり、疑問に答えたりするとき、自分のスキルがきちっとしたものであるかどうかというのが見えてくる。学生にとって、そうした怖さみたいなものがきつとあるのではないかなと思っています。

奥平：ある種、「成功の復讐」というか、きちんと指導してくれている上のアシスタントがいたので、私にはとてもあそこまで出来ません、というように。本来一緒に並んでくれるレベルだけでもよかったのですが、それがパパッと教えてくれるので、あのようにはなれないな、というか、そういう学生もいるのかなという気がしますけどね。

山田：いずれにしろ、確か、前期のべ100名、後期のべ100名、年間のべ200名くらい、このキャンパスでのべ1割くらいがアシスタントを経験していると考えたら、ものすごいボリュームだと思います。他にそんな大学ありません、凄いことですよ、と



櫻井武先生

外部の人に言われたことがありましたね。やはりのべ200人が授業サポートをあまり軋轢なくやっているのは、かなり大きな特徴ではないかと思えます。

「そして、これから・・・」

山田：一通りお話しましたが、一応2006年新カリキュラムは、むしろ充実したくらいかなという印象です。環境のほうもプログラミング教育を充実した雰囲気到现在なっています。今度着任される先生方も、結構eラーニングをご専門にされていたりします。そういう意味では非常にヘルプフルだし、いい形で情報系の中に入れてくれるかなと期待しています。高校でも、いわゆる情報教育が始まっているので、大学の情報リテラシーをやらなくても良くなるのではと言った議論もあつたりしますが、その辺はマクロに見たときに、あと5年くらいはこのままで続くのかもかもしれません。勿論少しずつカリキュラムは変えて行かなければなりません。その辺は皆さんどのように考えられているのでしょうか。こんなことが出来たらいいな、というようなお話とか。中村先生いかがですか。受け入れる側として、1年生まででこれくらいまではやっておいて欲しいというようなことはありますか？

中村：やはりもう一回(情報リテラシー教育に)必要な機能は、事例研・卒研で何かという洗い出しをするといいいのかという気がしています。確かに、メールとかWordとか、高校でも使えるようになって上がってくるのですが、統計分析系の先生は、Excelをもっと教えておいて欲しかった、と良くおっしゃっていますよね。確かにExcelがある程度使えると、実務的にも自分で手を動かしながら、いろんな概念を説明しやすいです。高校でも意外とやらなかったり、やっても形式的で、高校レベルだと習っても多分使い道がないのですぐ忘れちゃうのです。そういう意味で、使い道のあるものを、ああ1年の時にやっておいて良かったと、2年以上で思えるようなもので、もうちょっと洗い直ししてやってみると、まだいろいろ大学のリテラシーだから出来ることはあるのではないかなと思います。

山田：武山先生が、映像に関心がなくExcelに関心があつたら凄いいカリキュラムが、多分出来ていたという気がするのですがね(笑)。私は、初めてExcelのサンプルを作る時は、どういったサンプルを作つたらいいのかということがありましたね、やはり使うシーンというのがとても大切だと。

武山：本当に日常的に使われている先生がアイデアを出していくと、自然とそういうカリキュラムになると思いますよ。

中村：統計以外にも、グラフはある種の可視化ですよ。非常に素朴な可視化技法ですけど、意外とグラフがちゃんと作れないんですよ。あれ結構難しいみたいで。

奥平：Excel はリテラシー演習に出たり入ったりなんです。最初はなくて、高田先生が講義をされる時に、やはりここまでは基礎でやって欲しいね、ということで入れたのですが、実際はもう時期が間に合わずもういいかなということになりました。実は、2006年度は入っていません。それは1つには、先ほどの話で、前期でやっても暫く使う期間がないとほとんど忘れてしまって結局あまり効果がないと言われていたからです。今年度の新カリキュラムから、「記述統計」、「応用統計」という科目ができて、後期の「応用統計」は必修になりました。1年生は必ず全員が受け、それが2年生の「社会調査」に繋がるようになったので、広田先生にお願いして「応用統計」の例を教えてください、その例を参考にしながら、次年度から復活させる予定です。

「リテラシー演習」として見た場合に、スキルとして割り切って、これからメディア系で良くやるのであれば、JavaScript くらいはやったほうが良いという道と、もう一つは問題とされている溢れかえる情報をどう吟味して使いこなすのかといういわゆるリテラシー能力や社会とのコミュニケーションとの接点のところでの情報倫理を含めた教育を、どれくらいの重み付けでやって行くのかということだと思います。多分スキル自体はこれからどんどん上がってきて、PowerPoint なんかは説明が必要なくなるかもしれない。ほとんどの学生が分かっている。それならその時にどんなふうに扱うべきなのだろうか。例えば「情報探索入門」などに任せてしまう、ということもあるのかもしれないですね。

山田：そうですね。コラボレーションのための、ひとつの手段としてのPowerPoint だとすると、むしろ1年後期の「探索」辺りでPowerPoint をやって、前期はExcel 辺りに少し特化してやるのが良いのですかね。そういう議論はまたやってもいいのかもしれないですね。

奥平：もう Word はほとんど使いこなしていますからね。指定校推薦の学生に事前レポートを書かせたら、皆 Word で出して来ました。指定校推薦の説明会を2回やるのですが、2回目の説明会の際はグルー

ブワークをして発表させるのですが、ほとんどがPowerPoint を出してくる。作業をしているのは実際1人か2人かもしれないですがね。今度入ってくる学生くらいから、いよいよ高校で本格的に情報教育を受けているという時代になりますね。

中村：スキルとしては少しやっているかもしれないですけど、実際どう使うかという部分が、要は実務と組み合わせた使い方はやっていないということで、それを事例研・卒研に受け渡せるような位置付けについては、まだまだやれることがあるのかなと。

山田：そういうことはほかの先生もよく言われていて、情報リテラシー授業は1、2年生のときにやっても、2年生後半から3年生で中だるみしてしまい、あまりやっていない。リテラシー授業も確かに1年生の前後期では結構やるんですけど、2年生がちょっとね。今はプログラミングにしています。ただ、高学年になってもいつまでも情報リテラシー授業をやっている必要はないと思っています。私は大学の授業はこんな学問もあり、あんな学問もありという入口の状況を知るといっても十分意味があると思っています。私個人の性格なのかもしれないけど、事例研や卒論になって本当に必要になったときに、再度あるいはより詳しく自分でやればいいのかと思っています。大学での情報リテラシー授業は、やっぱりその程度じゃないかなと思います。授業でやっても、PhotoshopやPremiereにしても膨大なマニュアルのほんの最初の部分、つまり全体の20分の1くらいしかやれないわけですからね。後は、本当に必要になったときに、必要のところだけ学習すればいいのかなと。

奥平：基本スタントとして、出来るだけ土地勘を増やすというか、こういうことをやったことがあるという経験があると、再度やる時には、ああいうことをやればいいのか、こういうことをやればいいのかと分かるような導入編をまずやっておくことが大事だと思います。所詮人間は忘れるので、こういうことは大きな声で言っちゃいけないか(笑)。それを忘れてまた繰り返すことで書き込まれるところがあると思います。

武山：奥平先生がおっしゃることもそうだと思いますし、中村先生のおっしゃることも良くわかって、2年生のところにもし中だるみがあるとしたら、逆に言うと、そこをきちんと強化したメニューを作れば、3、4年になった時に学生の水準が相当上がってくると思います。そこまでしてあげる必要はないのではないかという議論もあると思いますが、やったらここまでいくよ、というスタン

スでよいと思います。特にこれからのITリテラシーのことを考えていくと、中高生である程度のレベルまで来て入学しますので、そうするとむしろ、メディアをどうして活かしていくか、ということのほうへウェイトが移って行かざるをえないと思います。一方で情報技術とかプログラミングのより高度なところを教えていくことが必要だと思いますが、それに加えて、スキルをどうやって活かしていけばいいのかということ、1年生と2年生において学ばせるという可能性もあると思います。「事例研究」・「卒業研究」につなげるような形で、もしカリキュラムデザインができれば、かなり効果も期待できるのではないかと思いますね。

山田：うちは今、そこは今度から統計関係を2年生3年生で充実させたのと、あとプログラミング関係ですかね、「プログラミング入門A,B,C」としていたのを、2年生前期からJava系とC系できちっとするというようにしました。

横井：あとメディアに関しては今、「モデリングとシミュレーション」のほうでは、他のソフトも、システムダイナミクスなどのソフトも取り入れていますが、Javaとか、Cをやってきた学生が工夫できる余地を残したプログラム、そういったもので繋げるように出来てきているかなと思いますね。だから1年前期のスクリプトから3年くらいまでは、ある程度繋がってきたかなと思います。

武山：「モデリングとシミュレーション」だったら、それを使って、何か環境問題のシミュレーションをやる、ということの繋がりをつけられるような、非常に初歩的なトレーニングみたいなものがあると、環境に進むけれど、モデリングとシミュレーションを手段として活かしてみようというのが出てくる。

中村：「文化環境フィールドワーク」なんかも、そういう意味づけが出来なくはないですね。

土橋：出来ますね。パソコンとかWebを使って何をしたいのか、あるいは何をすべきかと言うことを考えられるようなリテラシーというんですかね、なぜITを使うのかというノウ・ホワイ的なリテラシーを、いかにそこで身につけさせるかということが、今後課題となってくるのではないかと思います。

中村：「情報エコロジー演習」なんかも、そういう意味では近い・逆に棲み分けは難しいという話になりますね。

山田：そういう意味では、受け皿はある・「環境情報フィールド演習」にしてもね。

中村：情報については、ある程度あるといえはありますが。環境のほうは、意識的にそういうふうにし

ている受け皿的な科目が、あまり・聞くところのかもしれませんが、カリキュラムをぱっと表を見ただけでは分からない。

山田：一気に史先生の「地理情報システム (GIS)」とかね、そっちになってしまう感じがしますね。

中村：その辺は、環境情報学科のどこかで意識して作ってもらおうことですね。

横井：今回のカリキュラムは、あくまでプログラミングはやっておいて欲しいというのはわかりますが、その後学科のなでどう発展させていくのかということが、十分には検討されていない感がありますね。

奥平：プログラミングに関しては、どちらかという環境教育の中での利用というより、環境情報学科でも、就職先としてSE系に行く人が多いから、ということも考えれば必要だよ、ということもあるようですけども。社会に出てみたら一応やったことはある、だから「危険地帯」は避けることができるということもあるかもしれないですけど。

土橋：卒研とか修論の蓄積があるので、1,2年生のうちに、それを眺めるような機会がどこかであるといいなと思っています。

山田：先輩の卒研、修論を見るということですか？

土橋：ええ。それらを見て、情報リテラシーとか情報技術がどういうふうに活かしているのかとか、大学の中ですから研究として最終課題のイメージですよ。勿論Webに載っているから見ようと思えば見られますが、こちらから積極的に言わないと1,2年生で見ている学生は、そう多くはいないと思います。

奥平：それは来年度から始まるコース制に関連しますね。1年生の終りか2年生の履修登録前にときに、あるコースではどんなことをやるのかがアウトプットの情報として具体的に見えないと、あるコースのコース指定科目を取っておこう、ということを決めるときにもやみくもに決めることになりかねないので。それは教務委員会の課題ではありますね。

中村：はじめて知りました(笑)。修論・卒論に関しては確かにそうですね。アウトプットをどう見せるか。

奥平：卒論を見せるかどうかは別にしても、そのコース、その研究室ではこんな研究がされているから、じゃあ私はこの研究室を選びましょうということが出来るキーワードだけになるかもしれませんね。

山田：目的意識は、もう少しターゲットがクリアになってからでいいし、それが1,2年生から3年生にかけての繋ぎ部分のようなものになるのでしょうか。

奥平：研究室を選ぶときに、どんなことをやっているか

ということを知るのは非常に重要です。それをリテラシー教育の一環の中で、どう上手く埋め込めるのか、ということもあります。

横井：「That's ゼミナール」の様子を収録して、自分で見られるようになると良いのではないのでしょうかね。

中村：それはどうでしょう。昨年くらいから図書館に事例研の成果集が見られるようなアナウンスがありました。例えば「情報探索」のときにそういう資料もあるから見るようにという見せ方をしてもらうことは可能かもしれませんが。

武山：先ほど中村先生がおっしゃっていた、事例研究・卒業研究からリテラシーというのを、逆方向に洗い出してみるという作業も、やってみたら面白いと思いますし、学生にも分かりやすくなるのではないのでしょうか。

中村：以前、統計関係の科目から、どういうことが要りますかと声をかけたことがあるのですが、リアクションがあまりなくて寂しかった記憶があるのですが(笑)。もう一回機会があれば・・

山田：今日はでもね、10年間やってきたからこれをもう一回アセスメントをしておくという機会(笑)。

さて、これまで伺ってきて印象に残ったのは、1年生から2年前期までの充実した情報リテラシー教育のあとは、3年の後期の事例研究のとりまとめ・発表や4年の卒業研究になってようやく各ゼミ(研究室)で真剣に情報リテラシー教育の成果を使うと思うのですが、2年後期から3年前期くらいまで学部としての情報リテラシー教育の空白期間があるような気がします。このあたりがこのままでいいのかということ。それともうひとつは、今日はたまたま、環境の先生に一人も入ってもらわなかったのですが、今度は空間的に、環境との間でこういうローカルなディスカッションを一度した方がいいかなという印象です。同じようにアシスタント座談会の最後も、実はこういうコミュニケーション、情報共有を、先輩と後輩の間、あるいは自分たちと教員との間に、欲しいなということでした。同じアシスタントでも、彼らの理解度、受け止め方が一人ひとり違って、我妻君辺りは学科開設のころから知っているからまるで教員のようなのですが(笑)。でも今回情報共有して、これはこういう趣旨だったのか、といういい意味で最後はやっぱりコミュニケーションというよう

な話になるのかな、という印象を受けました。土橋先生あたりにはほとんど、周りの人たちと相談して提案ベースでまた、お願いできればいいし、割りところにはそういう雰囲気があるのかなとも思いますね。あと昔から言われていますが、複数でカリキュラム開発をするっていうのは、なかなかやろうと思ってもやれません。だからたまたま12クラスあるというのは、そういうことが出来やすい雰囲気なのかなと思います。かつて、6クラスのリテラシーの先生方が集まって、舞台にでる前日とは言いませんが、武山先生の書き下ろしのシナリオをいただいて、一生懸命読んで、翌日本番をやるようなことがありました(笑)。結果的にはいい方向になったかなと思いますけどね。12クラスになってしまうと、大きすぎてそういうことも出来なくなっています。最後はやはりコミュニケーションということになりますね。

奥平：最初の5年間くらいでこなれて上手く回るようになってきたので、その上でやはり、時代に即して若干の手直しみたいなことが今後ともあるのかなと思うのですが。

山田：そういう意味で、武山先生が、経験というよりは関心があって大事だということから活動されたのですが、いい意味でここまで育ててくれていると思って、凄いことだったんだと思うし、横井先生もひやひやもので、必死になってWindowsの初期のころから頑張っていたことが改めて分かりました。

あつという間に2時間ちょっとすぎてしまったんですね、お忙しい中をお集まりいただきありがとうございます。では、この辺で終わりにしたいと思います。

最後になりますが、この座談会(2007年1月16日実施)の原稿を上梓するにあたり情報メディアセンター事務課員で当ジャーナル編集委員会メンバーでもある原直美さんに一番大変なテブ起こしの労をとっていただきました。記して感謝申し上げます。なお座談会用原稿のとりまとめは編集委員の櫻井武が行いました。

(注) Windows, Windows95, WindowsNT, MS-OFFICE, Word, Excel, PowerPoint は Microsoft 社の製品です.
Photoshop, Premiere, Dreamweaver は Adobe 社の製品です.

OKUDAIRA Masashi

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科教授

SAKURAI Takeshi

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科教授

TAKEYAMA Masanao

慶應義塾大学経済学部准教授

DOBASHI Shingo

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科講師

NAKAMURA Masako

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科准教授

YAMADA Toyomichi

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科教授

YOKOI Toshiaki

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科教授